

比較地誌におけるリッターの方法

竹 内 啓 一

一

日本においてだけでなく、諸外国においても、大学課程の地理学の講義やセミナーの題目に、比較地理 (comparative geography vergleichende Geographie) や比較地誌 (vergleichende Länderkunde) というものがある。比較地誌といおうが、地表を何らかの基準によって諸部分に区分し、これらの諸部分の間の比較検討をおこなうのであるから、結局おなじことになるのであるが、そのような題目の講義やセミナー、あるいは類書の内容となると千差万別で、ひとつの科学としての比較地理なり比較地誌なるものの対象あるいは方法に関して、何ら共通の理解

が現代地理学において確立していないことがわかる。そこには、たとえば、朝鮮とイベリア諸国、あるいは英国諸島と日本とを、単に、半島国や島国だという理由で比較するという思いつきだけによる、一つの自然あるいは社会条件の共通性を基礎にした空間的記述内容の個別的比較から、——社会経済的發展条件の何らかの共通性から、たとえばイタリヤと日本とを比較するのも、基本的にはおなじ範疇に属する——諸空間単位を比較するための項目を、——勿論、自然条件によるとか社会経済的發展状況によるとかという一応の基準はあるにしても——羅列して、世界各地あるいは一国内の各地からの事例を比較するという、いわゆる近代古典地理学の体系にはかならないものまでがある。さらに、問題なのは、

地表を何らかの基準によって諸部分に区分するという場合のこの分割の単位である。これを、多くの言語では region に相当する言葉、あるいはその訳語、日本語では「地域」というタームで呼び、地誌という言葉は geo-graphy よりはむしろ regional geography を意味するものとして用いているのであるが、すでに検討したことがあるように、⁽²⁾「地域」という言葉を複合した地理的実質を覆いつくすことのない単なる一つの空間組織を意味する伸縮自在な操作的概念として用いることには問題がある。実質的な空間単位としての「地域」にも発展の論理があるし、⁽³⁾伝統的な「地域」への住民の帰属意識、すなわち regionalism と、現実に機能している「地域」との間には、すくなくとも西欧の消費社会においては、反動的とさえいえる乖離がありうるし、⁽⁴⁾領域的イデオロギ―が、世界どこにおいても regionalism のかたちをとるというわけではない。⁽⁵⁾

地誌とか比較地誌あるいは比較地理というのは、教育上の教科にすぎないのであって、その科学的意味内容、有効性を云々する必要はないのではないかという議論は、この場合あたらない。地理学が、社会がつくりだす空間

組織を研究対象にする科学であり、この空間組織が、社会それ自身の再生産にとっての必要条件であるというところとの関連で、この空間組織は、社会科学の意味における法則性をいくつか持っているはずである。地誌についていえば、場所に関する記述の羅列にすぎない因習的な地誌ならば、教育上の意義さえあるかないか疑わしいが、法則性発見のための基本的空間モデルに分解して地域分析をおこなう方法の上に立てば、実質的な意味での「地域」の意味を問いかえず可能性をもち込んだ科学的地誌が可能であるはずである。⁽⁶⁾同時に、このような地誌は、地域分析に関する共通のランゲージをもつかぎり比較可能であるし、比較を可能にするためのランゲージを探索する努力がなされるべきであろう。さらにここで注目しなければならないのは、西欧の近代地理学において、比較地理という言葉が用いられるとき、誰もが当然のこととして、十九世紀前半におけるリッターの著作を念頭におき、あるいは、リッターがのべた「比較」の観点を継承しようとし、あるいは、ダーウィニズムそしてそれに負ったエコロジーの誕生以前に属するリッターの目的論あるいは神学的宇宙観を批判しながらも、壮大

な体系化が、この近代大学における最初の地理学教授によってなされたこと、そして、その師弟関係を通じて、その体系が各国の近代地理学に大きな影響を与えたことを否定することはできないということである。

それでは、ダーウィニズムの影響⁽⁸⁾のもとでの、さまざまな色合いをもった環境論の説明を、ほとんど唯一といってよい理論的支柱にしながら、形態分析(景觀論)に地理学の独自性あるいは統一性の根拠を見出した近代古典地理学は、はたして、リッターの試みを正しく、すなわち有効かつ創造的に継承したのであっただろうか。換言すれば、現代地理学⁽⁹⁾において、比較地誌論または比較地理の理論的枠組みを構築しようとするとき、近代古典地理学の手垢のついたリッター評価、リッターの遺産継承を洗いなおし、リッターの比較地理の体系を検討しなおして見る必要があるのではないだろうか。生涯をかけて、十九卷二十一冊のまま未完におわった体系的地誌は、それが近代地理学に与えたインパクトによってのみでなく、十九世紀前半の西欧文化の中においてなされた偉大な知的営為の一つとして、それ自体現代における歴史的検討に値するのではないだろうか。本稿は、このような

課題に対するひとつのアプローチである。

(1) 近代古典地理学、あるいは近代地理学という言葉を用いて、われわれは、環境論的または形態(景觀)論的コンテクストの中での地表の諸事象の分布あるいは空間的諸関係の説明の試みを意味するものとして用いている。一九五〇年代の地理学における計量革命は、単に数学的方法の採用というように研究手段を革新させたのみでなく、演繹的論理の採用という点で従来の地理学の論理、あるいは理論らしいもののさえ欠如させた個性記述的な従来の地理学を革新させた。この計量革命を契機にして、あるいは計量革命の発展として、あるいは計量革命に対する反撥として、社会科学と広い意味での方法と問題意識を共有する現代地理学が成立してきたと理解される。

(2) 拙稿「地域」の概念と地域主義——比較研究、イタリアの場合——『一橋論叢』第八十四巻第六号 一九八〇年七五八—七六五頁

(3) Lévy, Jacques: Pour une problématique, Région et formation économique et sociale. *Espaces-Temps* 10/11 1979 pp. 80-107

(4) Claval, Paul: Régionalisme et consommation culturelle. *L'Espace Géographique* Tome VIII n°4 1979 pp. 293-302

(5) これについてはケベック州の例がある。

Claval, Paul: Le Québec et les idéologies territoriales.

Cahiers de Géographie du Québec Vol. 24 n°61 avril 1980 pp. 31-46

第三十二巻第五号 一九八〇年 四二八—四五一頁

(6) Brunet, Roger は、このような基本的空間組織構造を

chorème と呼ぶ。この再構成の試みを、Brunet, Roger: La

composition des modèles dans l'analyse spatiale. L'

Espace Géographique Tome IX n°4 1980 pp. 253-265

(7) このことは、彼の主要な弟子としてロシアの Semenov

Tyanshanskiy, P. 合衆国 GUYOT, A. フランスの Re-

clus, E. (フランス地理学派成立との関係ではルクリエの

場合、若干の留保が必要であるが)の名前をあげるだけで

も、このことは明らかであろう。

(8) これについては Stoddart, David R.: Darwin's

Impact on Geography. *Annals of the Assoc. of Ame-*

rican Geographers Vol. 56 1966 pp. 683-698 に詳しい

分析がある。

(9) 以前に発表した三つの論文において、古典的近代地理

学革新の上に成立した現代地理学の輪郭、その特色をほぼ

えがいたつもりである。次の拙稿がそれである。

社会地理学と第三世界——都市の場合——『一橋論叢』

第七十五巻第二号 一九七六年 一四三—一六一頁、主観

の地理学からの逆照射——社会地理学の位相——『一橋論

叢』第八十一巻第六号 一九七九年 六五三—六六七頁。

ラディカル地理学運動と「ラディカル地理学」『人文地理』

二

しばしば、貴族の家柄に生まれたアレキサンダー・

フォン・フンボルトとの対比において指摘されるように

——そして、十歳年長の彼がリッターに与えた知的影

響は圧倒的であり、またリッターの記述はフンボルトの

報告に多くよっている——カール・リッターは、一七

七九年、極めて平凡な中産階級の家に生まれた。早く父

親をなくし、母親は牧師と再婚したが、この養父によって、

カールは、チャーリンゲンの森のはずれに、当時ルソーの

エミールを読んで大衝撃をうけたザルツマン(Salzburg,

Ch. Gotthelf) なる人物が新たに設立した私塾に入れら

れる。これは、リッターの生涯と学問にとって、かなり

重要な意味をもつ。まず、この私塾において、カール・

リッターは、彼にリンネ、ビュッホンなどの新しい生物

学の知識を授け、さらに、彼を *Geographie* なるものへ

開眼させた教師グトムト(Guttmuths, J. Ch. F.)の指

導をうけることになる。後に、リッターが、銀行家ホル

ヴェク家の家庭教師になって、雇い主と色々衝突はあつ

たが、ともかく、彼のおかげで、ヨーロッパ各地を旅行することになった折、彼は、一八〇七年、スイスでわざわざイヴェルドンにベスタロツツイを訪れ、おそらく、同年に、フランクフルトで、リッター自身「一般比較地理学の創設者」と形容したアレキサンダー・フォン・フンボルトに会うことになったのには、この私塾でうけた教育が大きな影響を及ぼしていたと考えられる。ホルヴェク家においても、彼は、通常の家庭教師とちがって、別邸などをかりきって生徒をひきとり、ベスタロツチの理念にもとづいた教育をおこなおうとした。リッターが従来の政治的・行政的区画にしたがった土地に関する記述ではない新しい体系の地理学の体系を志すようになるのは、ジュネーヴ大学においてシスモンディの地中海文明史やド・ビクテの物理学の講義をきいていた一八〇九年頃であったと考えられるが、外的条件として、ナポレオン戦争によって、政治的境界線などというものがいかにはかないものであるかということを感じさせられたこと⁽¹³⁾があったとしても、そこには人間の空間的知覚の発展が、空間的諸関係を考察する科学を必要とするのだというベスタロツチの影響が明らかに認められる。このよう

な地理学観の上にはじめから立っていたリッターにとって、カント流の自然地理学⁽¹⁴⁾あるいは、十八世紀後半に、地質学者などの博物学者によってなされていた *reine Geographie* の主張、換言すれば、*eruditio utilis* と *eruditio inanis* と *vera* なるものだけを取り扱おうとする立場⁽¹⁵⁾は到底承服できないものであった。「自分の仕事をきちんとする人なら誰でも、そして自分の行為が何らかの成果をもたらすよう努める人なら誰でもが、自分の力の限界を意識しなければならず、また、自分の外に与えられたものとしてあるもの、すなわち環境を、それに対する自分の関係を知るのと同様に知らなければならない。そうだとすれば、明らかなことは、あらゆる人間集団、あらゆる民族も、自己の目的が失敗しないようにするためには、自己の内的および外的な力を、すなわち近隣にあるものの力と、外部から自己の内部に作用してくるあらゆる力に対する自己の立場とを熟知していなければならないということである。」⁽¹⁶⁾ここで主張されているのは環境決定論でもなければ神秘主義でもなく、まさに社会が作り出す空間関係⁽¹⁷⁾、空間組織の解明を課題とする地理学であったのである。

「本書の著者にここに見られるような特別の仕方で『諸事実についての偏見にとらわれない考え方』にもとづく配列をなさしめた基本的理念は、概念の真理性にあるのではなく、彼にとって真理であるものすべての全内容に、すなわち信念の領域にあるのである。この基本的理念は、著者の自然および人間界の中の生活から得られた本質へのある省察にもとづいている。この省察が自覚されるようになったのは、今世紀最大の一人の人物との対話によってであったし、そのようにして一方では、この科学における基本思想として確立されたのであるから……」⁽¹⁸⁾

この一八一八年に発表された文章で、「今世紀最大の一人の人物」と記されているのは、献辞にあげられているペスタロッチのことであることは明らかである。

このようにして、ペスタロッチの影響から、空間的諸要素の配列を、「この科学」すなわち地理学の基礎にすぎたリッターであったが、リッターは、たえず、*reine Geographie* が結局もたらすであろう社会、歴史に対する機械論的解釈に対して、いわば批判を先取りしたかたちで文章を書いたために、後世の読者にとっては、彼の目的論的宇宙観、神秘主義的表現が常に問題になる。こ

の場合、彼が、さきに指摘した両面の敵に対して、彼がよることになった思想が何であったかということ、彼が生きた時代の思想的状況に即して理解しなければならぬ。単なるドイツ・ロマンティズムの時代の子であったのではなく、彼は、彼なりに、たたかうべき相手を意識していたのであった。たとえば「人間および自然に対する考察をしようとすれば、個別 (*das Einzelne*) から出発して、その全体 (*das Ganze*) に対する関係に、すなわち、外見上偶然的にみえるものから、その本質において法則的なものに向かうことになる。個別から全体を完全に知ることは、全体そのものが同時に知られていないかぎり不可能である。」⁽¹⁹⁾ というかたちで表明されている彼の思想は、しばしばヘルダーの影響によるものとされ、⁽²⁰⁾ リッター自身も、ヘルダーの名前を著書の中で何回かにわたってあげているのであるが、全体の統一性に関する理論、部分あるいは個別から全体に到達する還元的 (*reduzierend*) 論理は、ベックが指摘し⁽²¹⁾ ニコラ・オバディアが見事に分析しているように、⁽²²⁾ リッターはその名前をまったくあげていないが、⁽²³⁾ 同時代の哲学者シェリングの新プラトン派哲学の達成に負っていたのである。⁽²⁴⁾

リッターがシェリングの哲学、ギリシヤ哲学に接しながら、その全体論的な宇宙論を形成していくのは、一八〇八年頃からのことであると考えられる。そして一八二二年、ゲッティンゲンのギムナジウムで歴史学・地理学を教えるようになった頃から、それまでになかった新しい構想による『一般比較地理』の準備にとりかかり、一八一五年には出版社を探すためにベルリンに赴き、一八一七年に第一巻の草稿を完成してこれが一八一七年から一八年にかけて二巻に分けて出版されて大きな反響を呼ぶことになる。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトが、リッターに注目し、彼の推薦で一八二〇年ベルリンの士官学校の教授になり、ベルリン大学での講義担当にも併任されて、そこで終生地理学を講ずるようになったのも、この『一般比較地理』初版が評価されたことによるのであった。

一八二二年のさきの二巻本を一巻にまとめた再版⁽²⁵⁾には、じまる彼の『一般比較地理』は、彼の評判をますます高め、彼の存命中にも、彼の著作のフランス語訳⁽²⁶⁾、英語訳⁽²⁷⁾、ロシア語訳⁽²⁸⁾も出版され、ベルリン大学における彼の講義も、次第に聴講者の数が増え、一八二三年からは四百人

収容の大教室で講義をするようになった⁽²⁹⁾。他方一八二四年から一八四八年の間、アジア地誌の大著にとりくむ一方で、彼はヨーロッパ各地を広範に旅行し、講義においては、ヨーロッパ地誌がかなりの比重をしめていた⁽³⁰⁾。しかしアメリカのクレイマーが指摘しているように、ヨーロッパ地誌においても、リッターは、自ら訪れた土地とそうでない土地について、その取り扱い方、記述の方法をまったく変えていない⁽³¹⁾。自らの見聞をも、一資料として扱い、たえず資料批判(Quellenkritik)を重視していた⁽³²⁾、いわばフィールド調査を最重視するにいたった近代地理学のそれと対極をなすリッターの地理学の姿勢を、われわれはそこに見なければならぬ。

貴族出身でありながら、一八四八年革命にさいして、変革の立場を支持したアレキサンダー・フォン・フンボルト⁽³³⁾とちがって、横柄な態度で立憲君主たることを拒否したフリードリッヒ・ヴィルヘルム四世と、彼がまだ皇太子であった頃から親しい友人関係にあったリッターは、常に保守・反動の立場に身を置いた。老年によることもあろうが、一八四八年以降、彼は、一八五二年短期間フランスを訪ずれた以外は、それまでさかんに行っていた外

国旅行をいっさいやめベルリン社交界との交渉もたち『一般比較地理』の刊行に全力を傾倒するようになる。

一八五九年五月、彼がたえず尊敬し、またともにベルリンに住むようになってからは、親交を続けてきたアレキサンダー・フォン・フンボルトが逝った。それを追うようにして、四カ月後に、リッターも世を去ったのである。一八五九年、それは、ダーウィンによる「種の起源」が発表された年であった。その影響は、ダーウィニズムとしてよりもむしろダーヴィニスムスとしてドイツの思想界においてより大きく、生態学の創始者ヘッケルを通じてラッツェルの地理学、さらにはフランスの近代地理学の形成に大きな役割をはたすことになるのである。一八五九年、それは、一八三九年にリッターの講義を聴講し、師の観念論にもかかわらず、人類の歴史と、環境という物質的基礎との関係という点で一つの示唆をうけたであろうマルクスが、「経済学批判のために」を発表して、史的唯物論の論理構造を見事に示し、「社会発展の法則性」という言葉を、リッターとはまったく違う意味で用いる知的営為を一步前進させた年でもあったのである。

(10) 以下、リッターの伝記に関する部分は主として、次の文献によった。

Kramer, Gustav: *Carl Ritter. Ein Lebensbild nach seinem handschriftlichen Nachlaß dargestellt*. 2Bde. Halle 1864-1870. Gage, W. L.: *The Life of Carl Ritter, Late Professor of Geography in the University of Berlin. Edinburgh and London 1867*. Nicolas-Obadia, George: *Bibliographie de Carl Ritter*. 1944. Ritter, Carl: *Introduction à la géographie générale comparée, Traduction de Danielle Nicolas-Obadia*. *Introduction et notes de Georges Nicolas-Obadia*. *Annales Littéraires de l'Université de Besançon*. Paris 1974. pp. 249-253 に収録されているものである。

(11) Kramer, G.: op. cit. によると、リッターは、Pestalozzi, H. に一八〇七年九月、一八〇九年九月および一八一三年一月の三回にわたって会っており、おそらく、最後の折、リッターは、ヘスタロッツに、後者の教育法にもとづく地理学の概説書を書くことを約束したようである。(Kramer, G.: op. cit. I. SS. 162, 196, 288) Ritter G. *Die Erdkunde im Verhältnis zur Natur und zur Geschichte des Menschen oder allgemeine vergleichende Geographie, als sichere Grundlage des Studiums und Unterrichts in physischen und historischen Wissenschaften* 第一巻のアフリカ篇の初版は、著者のかなり長い方法論的

序文をとらなつて、一八一七年と一八一八年に二冊に分けて出版されたが(決定版は一八二二年に一巻にまとめられた)この旧版には、旧師 Gutsmuth, J. Chr. F. の著書とペスタロツチの教育学者としての署名があつた Pestalozzi, Henri に対する献辞が記されてゐる。ヘンタロツチのリッターに与えた決定的な感化にこの序文は、Vulliamin, Louis: Charles Ritter, le géographe. *Le Chétien Evangelique* 12 1869 pp. 21-31 にきつてよく指摘をうける。Plewe, Ernst: Carl Ritter, Hinweise und Versuche zu einer Deutung seiner Entwicklung *Die Erde* XC Heft 2 1956 SS. 98-106 にきつてよく分析がなされてゐる。

- (21) Ritter, C.: *Einführung zur allgemeinen vergleichenden Geographie und Abhandlungen zur Begründung einer mehrwissenschaftlichen Behandlung der Erdkunde*. Berlin 1852 S. 25 以下の表現がある。近、リッターのこの一八二二年の書物の第一巻の序文に「この書物に於ける Versuch einer allgemeinen vergleichenden Geographie」と第二巻の Allgemeine Bemerkung über die festen Formen der Erde は、一八一八年に出版されたものの *Die Erdkunde in Verhältnis*……の第一巻初版(筆者末見)の序文として書かれたもので、一八二二年版一五六頁に「アフリカに関する記述に先立って収録されているものとまったく同じものである」とこの部分に関する引用は、「一

八五二年版のこの書物によることにする。

- (13) このことを最初に指摘したのは、キヤン Wisotzki, Emil: *Zeitströmungen in der Geographie*. Leipzig 1897 S. 222-258 である。
- (14) 管見する限りでは、リッターが Kant, I. に言及しているのは、*Die Erdkunde im Verhältnis*……の序章にきつて一箇所あるだけである。(Ritter, C.: op. cit. 1852 S. 57) この文獻をきつてみると、自然界の發達史に言及しているものの、Kant, I.: *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels* Zeit 1798 の「*Physische Geographie* 1801-1805 に言及したものはなくともある。
- (15) Gatterer, Christoph Wilhelm Jacob: *Verzeichnis der vornehmsten Schriftsteller über alle Teile des Bergwesens*. Göttingen 1786. Schulze, David Friedrich: *Über den allgemeinen Zusammenhang der Höhen über der Oberfläche der Erde*. Weimar 1803 など、その代表的なものとしてあげられる。
- (16) Ritter, C.: op. cit. 1852 S. 3
- (17) これは、ドイツ語の Raum, räumlich という言葉が、ラテン語系の space, espace という言葉のやうに、近年、宇宙開発や地域問題の顕在化とともに、はじめて日常語化したのとちがつて、もともと抽象的な概念を意味しながら、かなり日常的な用語であつたことによるのであるが、

リッターは、現代の読者には、異常に新鮮な印象を与える
 くらうに、Raum, räumlich とらう言葉も多く用いら
 る。このような傾向は、リッター以降のドイツ地理学にお
 いてはすたれ、近年になつてはじめて復活した。

(87) Ritter, C.: op. cit. 1852 S. 26

(91) Ritter, C.: op. cit. 1852 S. 10

(92) Schmitthener, H.: Die allgemeine Erdkunde Carl
 Ritters und dessen Stellung zur geographia generalis.
 Zum Problem der Allgemeinen Geographie und der

Länderkunde (Münchner Geographische Hef 4) 1954

S. 32ff. 以下の指摘は、Herder, R.:
 Herder Berlin 1880 I S. 33 以下の「ハヤム」の
 ハヤムと与えた思想的影響を指摘する。

(12) Beck, Hanno: Carl-Ritter-Forschungen. *Erdkunde*
 Band X 1956 SS. 227-233 以下 S. 228

(23) Ritter, C. (Traduction de D. Nicolas-Obadia) op.
 cit. 1974 Introduction et notes de Georges Nicolas-

Obadia など、このフランス語訳は、後に検討するように、
 Buret, E. と Desor, E. の訳や Reclus, E. の訳に比し
 て格段にすぐれたものであるが、残念ながらこの誤植が大

変多く、またジュゼッペ・ニコラ・オニダニアによる解説
 文の註は、番号が前後したり、引用箇所のページ数が間違

っていたりしている場合が多く、非常に読むに苦しむもの
 になっている。

なっている。

(23) これは、リッターの著書における引用乃至参考文献の
 あげ方に関して一貫して言えることであるが、博物学者、

旅行家などの書いた資料 (Quellen) は、同時代人のもの
 までふくめて詳細にあげているが、近代の哲学者や文学者

の書いたものは、せいぜい名前だけをあげて文献名を註記
 せず、多くの場合は、名前すらあげていない。たとえば

Ritter, C.: op. cit. 1852 SS. 17-18 で論じられてい
 る気候 (風土) と文明との関係は、周知のように Montes-

quien が *Espit des lois* 1748 で論じて有名になり、
 フランス語を「ハヤム」、他のヨーロッパの言語に訳されてい

る「読者」Herder の *Ideen zur Philosophie der Geschichte*
 der Menschheit 1785-1792 以下一般化したかたず

論じた問題であるが、リッターは「モンテスキエ」「ハ
 ヤム」の名前をあげたことなく、むしろ古代ギリ

シアのソクラテスに於いてこの問題を論じている。
 Schelling の場合にも、実際には、その影響を強うけ

ているのであるが、シェリングの名前を全然出すことなく、
 プラトンがティマイオスで展開した存在論、とくに、その

四元説を引用している。

(24) Schelling, F. W.: *Ideen zu einer Philosophie der*
Natur. Leipzig 1797, *Erster Entwurf eines Systems der*

Naturphilosophie Jena und Leipzig 1799 フォン・ハ
 ヤム夫妻が Jandelewitsch, S. 訳による公訳 Schelling,

F. W.: *Essais* Paris 1946 以下のリッターに対するシ

モリッングの影響を論じ、リッターの伝記に『そのモリッングの伝記本の用語をかなり用ゐる』。das Ganze に大文字の le Tout といふ訳語をもつたのも、モリッングの伝記になつたものと認めざるを得ない(前掲 *Essais* pp. 72-73. Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling: *Sämmtliche Werke* II 1797-1798 Stuttgart und Augsburg 1857 SS. 41-42)。

(25) (1) 註じられた Ritter, C.: *Die Erdkunde im Verhältnis zur Natur und zur Geschichte der Menschen*.....

は、通巻一八二二年の一冊に『ユマリンの G. Reimer から出版されたメンリッヒに因する二版 I *Afrika* を第一巻の決定版と考へらるゝ』。その他の巻の出版は次の通りである。

- II *Der Norden und Nord-Osten von Hoch-Asien* 1832
- III *Der Osten und der Süden von Hoch-Asien* 1833
- IV *Der Süd-Osten von Hoch-Asien: dessen Wassersysteme und Gliederungen gegen Osten und Süden* 1834
- V-VI *Die indische Welt* 1835-1836 VII *West-Asien, Ubergang vom Ost-nach West-Asien* 1837 VIII-IX *Iranische Welt* 1838-1840 X-XI *Das Sufeland des Euphrat und Tigrissystems* 1843-1844 XII-XIII *Die Halbinsel Arabien* 1846-1847 XIV *Die Sinai-Halbinsel* 1848 XV *Palästina und Syrien* 1-2 1850-1851 XV *Palästina und Syrien* 3 *Judäa, Samaria, Galiläa* 1852

XVII *Syrien* 1 *Phönicien, Libanon und Gebirges Nord-Syrien*, 2 *Das Stromsystem des Orontes und das Flache Nord-Syrien mit der Amanuskette*——*Namen- und Sachverzeichnis zum 16ten und 17ten Theil der Erdkunde*, bearbeitet von G. Fr. H. Müller 1854-1855 XVIII-XIX *Klein-Asien* 1858-1859

このようにして、彼が一八一〇年代に構想してゐた『ヨーロッパ、新大陸に関する仕事は結局まとめられなかったが、彼がこれらの大陸に大きな関心を示してゐたことは、彼の講演、その他の出版物から十分に知ることが出来る』。一八四九年の *Bulletin de la Société de Géographie de Paris* に著された M. Jomard: *Notices sur la pente du Nil supérieur et sur divers sujet de géographie et d'ethnographie, précédées d'une lettre de Carl Ritter sur le plan de sa géographie comparative* 53 p. に於ては本文の廿二『一般比較地理』は、『ヨーロッパの出口までだが、自分の老齢のためならなかつ、何となりの最後の大部の部分を完成せよと』(.....j'espère encore que mon âge avancé me permettra d'entrer dans ce dernier sanctuaire) といふ希望を記してゐる。

(26) *Géographie générale comparée ou Etude de la terre dans ses rapports avec l'histoire de l'homme, pour servir de base à l'études et à l'enseignement des sciences physiques et historiques*. Traduit de l'allemand par E.

Buret et Edouard Desor. Paris Paulin 3 vols. 1835-1936 これは、一八二二年第一巻のみの訳であり、この仏訳は後に例示するように、読み易いがあまり正確な訳ではない。

(27) 彼の存命中に出版されたのは、彼が一八四二年に発表した *Die Colonisation von Neu-Seeland. Ein Vortrag* が、すぐ英訳された *The Colonization of New Zealand*. London 1842 (筆者未見) だけである。一八六五年に Gage, W. L. が英訳した *Comparative Geography*. Edinburgh and London は、リッターの死後、彼の弟子 Daniel, H. A. に作られた講義録 Ritter, C.: *Allgemeine Erdkunde* Berlin 1862 を訳したものである。

(28) *Землеведение Азии Карла Риттера, Географическая страна находящихся внеподчиненных отношений с Россией*, т. 1-5. пер. П. П. Семёнова. СПб. 1856—1879. これは *Die Erdkunde*……のロシア帝国に關連する地帯についての部分訳がリッターの弟子セミノフ(当時まだチャンシヤンスキーの名前は与えられていなかった)によってなされその第二巻まではリッターの生前に出版されているが、筆者は未見である。

(第二巻と第三巻は、筆者が利用したバリの国立図書館のカタログにはのっているが現物は行方不明のことであった。カタログによるかぎり、ブリティッシュ・ライブラリーにあるものも、ロングレス・ライブラリーにあるものも、

第一巻以外の巻である)

(29) 彼が士官学校をやめ、ベルリン大学の正教授になったのは、一八二五年のことである。

(30) これは、死後作られた三冊の講義録 *Geschichte der Erdkunde und der Entdeckung*. Vorlesungen an der Universität zu Berlin gehalten von Carl Ritter, herausgegeben von H. A. Daniel. Berlin 1861, *Allgemeine Erdkunde*. op. cit. 1862, *Europa*. Vorlesungen an der Universität zu Berlin gehalten von C. Ritter, Herausgegeben von H. A. Daniel. Berlin 1863 に作られたものである。

(31) Kramer, Fritz L.: A Note on Carl Ritter, 1779-1859 *Geographical Review* Vol. 49 1959 pp. 406-409

(32) Ritter, C.: op. cit. 1852 SS. 29-31 これは、彼は、前掲一八四九年の *Bulletin de la société de géographie de Paris* に掲載された手紙において、自分の『一般比較地理』が、いかなる仮設の上にもとづくものでなく、観察および文献にもとづく諸民族の歴史の事実から出発するものであることを強調している。

(33) A. von Humboldt と一八四八年革命との問題について Botting, Douglas: *Humboldt and the Cosmos* New York-Evanston-San Francisco-London 1973 p. 268 に及ぼす言及を参照する。

(34) ヘーゲルの観念論的歴史哲学を批判しようとしていた当時のマルクスに、リッターの講義が、このような意味で影響を与えなかったはずがないという指摘は、Cornu, Auguste: *Karl Marx et Friedrich Engels, leur vie et leur oeuvre*. Vol. I 1955 p. 133 におおつてなされている。

三

一八一八年に最初に発表された『一般比較地理』の序文において、リッターは、何故「一般」なのか、何故「比較」なのかということをし、次のように説明している。「この大地に関する記述が『一般的』と呼ばれるのは、すべてを述べようと努めるが故にではなく、特定の意図を考慮に入れることなく、大地のあらゆる部分とそのあらゆる形態とを、それが流動的なものであれ安定的なものであれ、また、それが遠方のものであれ自国のものであれ、また、それが文明化された民族のものであれ砂漠のものであれ、まったく同じ関心を払って研究しようとするからである。」⁽³⁵⁾「それを『比較的』と呼ぼうとするのは、先例として学ぶべき他の学問分野、就中、比較解剖学によってなされたのと同じ意味においてである。」⁽³⁶⁾こ

の「一般的」の意味において、リッターの『一般比較地理』は、一見退屈なまでに、同じ規準で分類された諸要素にしたがって、自然、人文の諸現象に関する記述をくりかえす。しかし、キュヴィヴィエによってその展望が開かれた比較解剖学とのアナロジーで、部分が全体との関連なしには考察されえず、また全体の研究が部分の研究なしにはなされえないことを、おそらくは比較解剖学以上の説得力をもってリッターは示し、「部分から全体へ」と「全体から部分へ」の相互的アプローチ⁽³⁷⁾と、部分がより小さな部分にとつて全体たりうるという空間組織に関する階層的アプローチ⁽³⁸⁾とを提示したのである。この見解が最も体系的に提示されたのは、一八三三年、ベルリン王立アカデミーにおいてなされた講演「地理科学における歴史的要因について」⁽³⁹⁾であって、ここでは、このような方法をとることによって、地理学は、はじめて「記述から、記述されたものの法則へ、単なる列挙から、地表空間の関係の研究 (Verhältnislehre der irdischen-tüllen Räume) へ、局地的および一般的な地的諸現象の因果的相互依存関係へ」⁽⁴⁰⁾進むことができることがはっきりとのべられているのである。

彼にとって、地理学とは、すぐれて空間関係の組織 (System) または秩序 (Anordnung) を研究する科学であって、環境論、すなわち自然環境の社会に対する拘束性は、その主題ではなかった。それならばさきにのべたように、河系をもって自然的な (physikalisch) 空間単位とし、そのような空間単位の設定と分析とをもって地理学とする reine Geographie を批判しながら、『一般比較地理』において地表を、まず部分 (Erdrteil) に分割するに際して、実際には、大陸に分け、さらに各大陸の、形態的な軀幹 (Stamm) および分節 (Gliederung) の構造を分析したのは何故であろうか。さきに指摘したように、他方でリッターは、もう一つの敵、地理学を国家学の侍女たらしめる政治・統計地理学的傾向を、たえず批判していたことをここで想起しなければならない。ナポレオン戦争は、リッターが注目したようにヨーロッパで王朝国家がはりめぐらしていた国境線を滅茶滅茶にしたが、それだけではなく、他方では、民族国家なるものの形成をうながしたのであった。リッターがそのための国民経済の母胎たるべき領域的経済圏の形成、そして、文化的領域を単位にした民族意識の高揚が、ナポレオン戦

争後のヨーロッパにおいて進行していたという事実を無視した、このことが空間組織を研究する地理学にとって決定的に重要な意味をもつということに、すくなくとも考慮を払わなかったということは、たしかにリッターについてまず指摘されるべき限界である。しかし、リッターが丹念に膨大な資料を集め、その批判的検討の上に地誌をまとめていた非ヨーロッパ世界について、当時、そのような社会経済的空間構造を云々することがはたしてできたであろうか。当時、ヨーロッパにもたらされていた資料から知ることができたのは、いくつかの都市という点と、それらを結ぶ交通の線のみであって、その他の部分は、世界地誌という尺度からみれば、余りに小さな閉鎖的自給的経済の細胞が無限にひろがっているものとしてとらえられ、自然的単位による以外に、空間関係を論じることができなかったのではなからうか。そこには、リッターにとっての時代的制約があったことも認めなければならぬであろう。しかし、たとえば、一八五〇年、ベルリン王立アカデミーにおいておこなった講演「地球の表面における空間的秩序と歴史の発展過程におけるその諸機能について」⁽⁴⁾において、リッターは、面積におい

では、全地表の二〇分の一を占めるにすぎない部分 (Theil) が、残りの二〇分の一を、近時になって (in der zweiten Hälfte der Zeiten) 支配するようになったことこそが、地球の空間秩序にとって重要であることを正当にも指摘しているのである。

空間組織の構造を、そして全体と部分の階層的関係を分析することこそが、彼の比較地誌の主要課題であって、環境論的分析が主要な関心ではなかったことは、環境の影響についての彼の記述が、一貫性を欠いていることからも逆に知ることができる。当時、彼が分析することのできた資料から、たしかに、彼は、後世色々と引用されるにいたったような、多くの環境決定論的断言をしている。しかし、同時に、彼の文章から、人間の空間組織形成にはたす積極的役割に関する指摘を数多く指摘することも可能である。すでに『一般比較地理』序文においても、たとえば大都市の住民は、その必要を人工的にみだすことによって自然から全く自由になっていることなどが指摘されているが、一八三年の講演は、そのテーマから当然のことではあるが、技術の進歩、あるいは将来なされるであろうスエズ運河とパナマ運河の開さくなど

が、世界各地の空間関係をまったく変えてしまうであろうこと、⁽⁴³⁾ ウラルが障害としての役割から通路としての役割をもつようになったのも、人類の歴史の発展の結果であることなど、⁽⁴⁴⁾ 近代古典地理学における可能論者の言辭よりも、歴史的発展の意味をはるかにしっかりと把握した指摘にみちているのである。「かつてペーコンとライブニッツが抱いたような、そしてヘルダーが構想したような、そしてまた近年、色々なやり方でくりかえし試みられているような歴史哲学においては、これらの地理的要素、あるいは地球の空間条件に、ますます大きな意義を与えようとしてきた。しかし、地理科学は、それが抽象的なまがいのものでなく、地的空間諸関係の真の研究であらうとするならば、まさに歴史的要因なしにすまずことは殆んど不可能なのである。そのようなまがいのものによってでも、たしかに、広範な景観を見わたすための枠組みや骨組みは与えられようが、その景観の本質的諸関係、内面的および外的法則性による空間の把握は与えられないのである。」⁽⁴⁵⁾ これこそが、近代古典地理学による評価の手垢から免れたリッターの言葉なのである。

- (35) Ritter, C. op. cit. 1852 SS. 24—25
- (36) Ibid. S. 25
- (37) Ibid. SS. 10—12
- (38) Ibid. SS. 57—58, 158—160
- (39) *Über das historische Element in der geographischen Wissenschaft*. Eine in der königlichen Akademie der Wissenschaften gelesene Abhandlung Berlin 1834 には、前掲書 SS. 152—181—に収録されている。
- (40) Ibid. S. 156
- (41) *Über räumliche Anordnungen auf der Außenseite des Erdballs, und ihre Funktionen im Entwicklungsgange der Geschichte* Berlin 1850 以下、前掲書 SS. 206—246 に収録されている。この講演は、ヒリヤ・ルクリュに「49」 De la configuration des continents sur la surface du globe et de leur fonctions dans l'histoire, mémoire par Carl Ritter (avec un préambule d'Élisée Reclus) *Revue Germanique* Novembre 1859 pp. 241—267 とらう題名で、フランス語に訳されている。このルクレの訳文については後に検討する。
- (42) Ritter, C. op. cit. 1852 S. 22
- (43) Ibid. SS. 173—175
- (44) Ibid. S. 167
- (45) Ibid. S. 153

四

リッターの目的論的宇宙観、シェリングの哲学の影響をうけた余りに観念論的、ときには理解を絶した神秘的表現に対する批判は、すでに、リッターの存命中にフレールによってなされた⁽⁴⁶⁾。リッター自身は、自己の地理学を、すでに見たように何らの偏見、仮設にもとづかない実証的な科学を指向するものと考えていたのであるから、この種の批判にはかなり当惑気味で、⁽⁴⁷⁾実証的、帰納法的な自然科学的方法に地理学が依拠するのは当然であるし、自分の方法もそれであるとフレールに賛意を表しつつも、二つの点で、フレールに絶対にくずらなかつた。すなわち、地理学から人的要素を排除して自然科学に徹するべきであるというフレールの主張と、大陸を、全地表の部分として、それ自体有機的全体として把握することに對するフレールの批判に關してである。しかし、ドイツにおいて、リッターの没後、ベルリン大学における地理学教授のポストは空席のまま、すでに多くの人文地理学説史の研究者によって指摘されているように、ラツェルによって、生物地理学的方法によって人的要素

が地理学に復活されるまで、ドイツにおいては、いわゆる「ベシエルによる反動」、機械論的自然地理学万能の時代をむかえるし、ダーヴィニスムスの洗礼をうけたラッセルがリッターに関心を示したとすれば、それはむしろリッターの環境論的記述の断片に対してであった。

諸外国にあって活躍したリッターの弟子達、あるいは紹介者達は、十九世紀、とくにその後半の機械論的科学観の支配する知的環境のもとで、シェリングの哲学に基礎をおくリッターの「空間組織分析の科学」、「空間関係解明の科学」としての地理学を、正面きって主張できなかったし、また、彼ら自身、リッターの地理学を全面的には理解していなかった。われわれが、近代地理学によるリッター評価の手垢というのは、第一には、リッターにあった全体と部分との階層的空間関係理解の欠落であり、第二には、その結果としての、リッターの環境論的矮小化である。

地理学の研究そのものが、その分権主義的アナキズム、分権主義的エコロジズムの実践と密接に結びついていたエリゼ・ルクリュの場合⁽⁴⁸⁾、リッターにあった全体と部分の関係に関する理論は、おそらく理解されなかった

であろうし、また、それを表現するリッターの神学的表現の故に意図的に拒否された。すでに註(41)で指摘したように *räumliche Anordnungen auf der Außenseite des Erdballs* という題名の一部を *la configuration des continents sur la surface du globe* と訳したところに、空間秩序の研究としての地理学というものに対するルクリュの反対というよりも無理解が示されている⁽⁴⁹⁾。このアナキストは、士官学校教授をつとめ、皇帝フリードリッヒ・ウィルヘルム四世の友人であったこの老地理学者の容姿を、翻訳文に先立って尊敬をこめて描写しているのであるが、リッターの文章中にあって、極めて重要な意味をもつ *das Ganze* という概念を、リッターの用いた意味ではまったく理解しようとしなかった。この言葉を文章中からおとししまった⁽⁵⁰⁾、ひどい場合には *das Ganze* という言葉のある文章全体を訳文からおとししまった⁽⁵¹⁾。論旨のはこびから、どうしても訳さなくてはならない場合には *ensemble du continent* とか *continent* などという言葉をあて、一八三六年の『一般比較地理』のブルレとデソール訳によって用いられた *tout*、一九七四のニコラ・オバディア訳で用いられた *le*

Tout という言葉を一度も用いていない。これは勿論ルクリュの思想によるものであるが、空間秩序(räumliche Anordnung)という視点を欠いたルクリュは、リッターを、環境論的なコンテクストにおいてのみとらえるという矮小化をしてしまったのである。一例をあげれば、前からの論旨の展開からみて、大陸の各部分が、技術手段を受け容れ完成させる能力のおかげで、現在ヨイロッパがとげているのと、同様の变化をとげるであろう、⁽⁵⁴⁾というこの講演の結論部分を、ルクリュは、人類全体が工業によって、過去においてなしたのと、同様の自然に対する変容をなすであろうという意味に訳してしまっているのである。

リッターの文章の環境論的歪曲は、なにもルクリュにはじまったことではない。bedingen という言葉は、日本語でも、「条件づける」「拘束する」というような意味に素直に訳されるべき言葉であり、⁽⁵⁵⁾ジョルジュ・ニコラ・オバディアが指摘しているように、これをフランス語にする場合、リッターの文脈の中では、être la cause, provoquer, conditionner といった言葉をあてておくべきであろう。比較地理の研究における人類の位置づけは、この地球

上の諸民族が置かれている自然との本質的諸関係が、このようにして徐々に問題になってくるのであり、「それらの諸関係から、発展の状態に関して、自然によって条件づけられた主要な方向がすべて由来してくるようになるのである」⁽⁵⁶⁾というようにのべられているのであるが、一八三六年の仏訳『一般比較地理』の序文では、後半の部分が「これら諸関係によって、われわれは、自然の宿命的影響のもとにたどる発展の方向を認めることになるのである」⁽⁵⁷⁾という工合に「fatal」という言葉が勝手につけ加えられているのである。たしかにリッターは、自然の影響が不可避であるという意味で eine unabwendbare Abhängigkeit という表現を他の箇所でも用いていたが、フランス語の fatal という言葉が意味するような宿命的決定論とは、まったく無縁であった。リッターをこのように訳すること、あるいはそのような訳文によってリッターを読むことによって、近代地理学は、彼の目的論、神学的宇宙論とともに、彼が確立した空間組織研究の科学としての地理学の価値ある一連の公理群を捨て去ってしまったのみでなく、環境論というイデオラの中で、リッターの虚像を作りあげたのであった。⁽⁵⁸⁾

活字で一〇行にわたっている。

- (32) Ritter, C.: op cit. 1852 S. 220. Reclus, E. 説 op.
cit. 1859 p. 251. この説は國のたつじゆなる Gesetz der
Anordnung des Ganzen のるを直観のるを綜合してその
すべしをそのるべきを其のるべきに於て其のるべき
(33) Ritter, C.: op. cit. 1852 S. 236. Reclus, E. 説 op.
cit. 1859 p. 262
- (34) リッターの説 (Ritter, C. op. cit. 1852 S. 246)
す。 Andererseits läßt die größere Empfänglichkeit und
mit jener weiterführende Perfectibilität der Landwelt,
nämlich der trocknen Seite der Planetenrinde der
continentalen im engem Sinne, kaum einen Zweifel
mehr übrig, daß auch auf ihr die Möglichkeit gleich-
großartiger Umwandlungen durch Kunstmittel gegeben
ist für neue Funktionen derselben in dem Entwick-
lungsgange der Menschengeschichten. そのるべきをそのる
べきに於て Du rest, la haute perfectibilité du globe, qui
met en oeuvre tous les éléments de développement
qu'il soit, nous convainc que l'industrie saura, d'une
manière aussi grandiose que par le passé, transformer
la nature pour les nouvelles phrases d'une humanité
toujours nouvelle (p. 266). そのるべきをそのるべきに於て
そのるべきをそのるべきに於てそのるべきに於て
- Par ailleurs, l'extraordinaire réceptivité et la perfec-
- (35) Ritter, C.: op. cit. 1874 p. 6
- (36) Ibid. p. 22 説はす。 Auf diese Weise kommen nach
und nach alle wesentlichen Naturverhältnisse zur
Sprache, in welche die Völker auf diesem Erdrunde
gestellt sind, und es sollen aus diesen alle Haupt-
richtungen ihrer entwickelten Zustände, welche die
Natur bedingt hervorgehen.
- (37) Buret, E. et Desor, E. 地層誌卷 1836 p. 26 の説
をこの説はす。 Nous étudierons ainsi tous les rapports
essentiels dans lesquels les peuples sont placés sur le
globe de la terre: ces rapports nous conduiront à
reconnaitre toutes les directions dans lesquelles ils
marchent à leur développement, sous l'influence fatale
de la nature.
- (38) フォンハンス語以外のデキメニアに於ける近代地理学に

(97) 比較地誌におけるリッターの方法

おけるリッターの歪曲、矮小化の事実を示さなければなら
ないのであるが、すでに、紙数がかかなり制限をこえたので、
これを別の機会にすることを約束して読者の容赦を乞いた
い。

* 本稿は昭和五十五年度および昭和五十六年度文部省科学

研究費総合研究A「地理思想の伝播と継承に関する比較研
究」(課題番号五三八〇二二 研究代表者 竹内啓一)に
よる研究成果の一部である。

(一橋大学教授)